

令和2年度 第1回小樽市人口対策会議 概要

- ・ 日 時 令和2年10月9日（金）15時00分～17時25分
- ・ 場 所 市役所別館3階 第2委員会室
- ・ 出席者 鈴木座長、樋口委員、竹田委員、佐林委員、高橋委員、小倉委員、岡部委員、沼田委員、杉山委員、永田委員、藤井委員、佐々木委員、（道新）鈴木委員、（公募）鈴木委員、小山委員
- ・ 欠席者 島尻委員、吉川委員
- ・ 事務局 総務部企画政策室長、企画政策室主幹、企画政策室主査

事務局 <開会宣言>

<委嘱状交付> 市長より

迫市長 <挨拶>

みなさん、こんにちは。小樽市長の迫でございます。委員の皆様には、大変お忙しい中、本日の会議にご出席いただきまして、ありがとうございます。また、皆様には日頃から市政の推進にあたりまして、ご理解ご協力をいただいておりますことに、この場をお借りしましてお礼を申し上げたいと思っております。今日は15名の委員の皆様へ委嘱状を交付をさせていただきました。以前から委員をお引き受けいただいている皆様、そしてまた新たに就任をいただいた皆様には、引き続き、様々な視点からご議論いただければと思います。

ご存じのように、小樽市におきましては様々な課題がありますけれども、やはり一番大きなものとして人口の減少問題、或いは少子高齢化への対応、こういったものが大変大きな課題であるというふうに思っておりますし、一方ではすでに、国立社会保障人口問題研究所の推計によりますと、2045年には本市の人口も6万人台まで減少すると、こういった深刻な数字も推計としてすでに現れているところでございます。私どもといたしましても、様々な対策を講じながら、可能な限りこの人口の減少のスピードを、特に小樽の場合、他の自治体よりこのスピードが速いというふうに認識をしておりますので、何とか様々な対策を講じながら、この現象のスピードをなんとか鈍化することができないか、そんなことで、皆様方のお力添えをいただきたいというふうに思っております。

今回は国のコロナウイルス対応に伴いまして、国のほうから交付金も配分いただいておりますけれども、その臨時交付金と言いますけれども、この交付金も活用しながら、今は在宅勤務、或いはテレワーク、そういった取り組みが進む中で、本市としてもそういった方々になんとかこの小樽に目を向けてもらえないか、そんな取り組みも新たな事業として（予算に）計上させていただいたところであります。

今日は議事の中に、第1期の総合戦略の総括についてと、それから第2期のこれからの総合戦略について、ご議論をいただくことになっておりますけれども、私から一つお願いを申し上げたいこととしては、今回第1期の総括もいただくことになるんですけども、庁内ではすでに議論を終えてはいるんですけども、資料の中には、これまでの取組みの指標に対してどれだけ実行ができたか、というような考え方が示されておりました。私としてはそれは資料として比較的よくまとめられていると思っておりますけれども、果たしてこれと、様々な人口対策を構成している政策が順調に進んでも、極論ですけども、人口減少のスピードが落ちていかないということであれば、その政策は果たして適切だったのか、ということになるのではないかと、というふうに

思っているわけでございます。今日はそういった部分について、事務局のほうから報告があると思いますし、またこれからの人口対策を考える上でも、指標と人口の動態といいますか、これがどう変化しているのか、そういった視点でご議論いただければ、と我々としては大変大きな力になるのではないかな、というふうに考えているところでございます。

今日は少し長い時間の会議になりますけれども、小樽市政のためにどうぞ活発なご意見をいただければというふうにご期待を申し上げまして、ご挨拶に代えさせていただきたいと思っております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

<座長の指名>

迫市長 座長についてでありますけれども、委員としてご意見をいただくとともに、また公平公正な立場から会議をまとめていただく役ということでありますので、昨年度に引き続きまして学識経験者としてご参加をいただいております小樽商科大学の鈴木副学長に座長をお願いしたいと考えております。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

鈴木座長 <挨拶>

ただいまご指名にあずかりました、小樽商科大学の鈴木でございます。このような形ですでに2回ほどやっておりますので、新たに申し上げることもございませんが、この間に小樽の人口も毎年2,000人という非常にリズム正しい形で減少しております。この減少数というのは北海道内では函館に次いで大きいものとなっている次第です。一昨年そして昨年とそのような現象を続けていく中で、長らく北海道では7位の人口数の街でありましたけれども、江別そして北見に抜かれまして、現在9位ということで、背後には千歳がひたひたと迫ってきているという、そういう状況でございます。このような状況をなんとか改善することはできないかと、市役所一丸となって尽力している最中ではありますが、皆様にもそのお知恵をぜひ拝借したいということで、この会議の実りある成果を期待しているところでございます。それでは皆様、よろしくよろしくお願いいたします。

<市長退席>

鈴木座長 <会議の進め方等について、事務局の発言を許可>

事務局 この会議の内容は、前回までに引き続き公開させていただきまして、会議資料そして会議概要は公表することとさせていただきたいと思っております。また、今年度予定している会議は本日のみでございますが、今後ご説明いたします第2期総合戦略、こちらの見直しが必要となった場合には、この会議にてご意見いただくことになっておりますので、その場合は第2回の会議を開催させていただこうと考えております。本日若しくは会議後におきまして、皆様から頂きましたご意見につきましては、事務局で取りまとめをいたしまして、庁内で検討をして、その結果を共有させていただきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願いいたします。

鈴木座長 <事務局からの説明に対し、意見や質問を求める>

鈴木座長 議事録ですか、それとも議事要旨ですか。

事務局 議事録に近いものです。公表する際には、委員の皆様にご内容を一度ご確認いただいたから公表させていただきます。

鈴木座長 <委員の方々を1人ずつ紹介>

樋口委員 樋口でございます。今年で2期目ということになりますが、小樽市は魅力ある可能性のある街でございます。引き続きよろしく願いいたします。

竹田委員 竹田と申します。この4月から小樽に赴任となりました。小樽の雇用情勢ですとか、可能な限り向上に向けて取り組んでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

佐林委員 佐林です。この会には平成26年から参加させていただいて、非常に長くなっております。最近を見ますと、コロナの関係で非常に経済や暮らしに大きな影響を受けていると思います。小樽の総合戦略のほうに何らかの形でまた見直しが必要なのかな、と考えております。どうぞよろしく願いいたします。

高橋委員 Mアシストの高橋です。僕も平成26年からもう6年くらいこの委員を務めているんですが、さっぱり小樽市の人口減少は止めることができません。それは先ほど市長が述べたように、政策が間違っていたかもしれない。間違っただけでも非常に効力の弱いものだったのかもしれない。それとも、世の中の流れで、人口減少は小樽だけの問題じゃないのかもしれない。先日も、道新さんに載っていたんですが、ほとんど札幌に吸収されている。その札幌も都市圏に吸収されている。そんなことで、今回のコロナですね、やはり都市集中型、人口の密集がですね、こういうことを招いたのではないかと。逆に我々はコロナの後には元へ戻らない、と。現状を打破するのではなくて、それを受け入れて、人口減少でも仕方ない、と。その中で我々はどう地域の中で生きていくか、楽しく生きていく、ということを考えないとならない時期じゃないか、と考えています。

小倉委員 平成30年からなので3年目になります。どうぞよろしく願いします。

岡部委員 わたくしは昨年12月から小樽に赴任しておりますが、コロナの関係でこういった会議がなかなかできず、不慣れな部分があるかと思いますが、発言も含めて勉強していきたいと思っておりますので、よろしく願いします。

沼田委員 道銀の沼田です。7月から着任しました。前任は本部の地域創生部長を担当しておりました。よろしく願いいたします。

杉山委員 杉山と申します。分不相応ながら、市の総合計画審議会のほうでも委員をさせていただいて、お世話になっておりました。そこでも人口問題と子どもの問題は、すごく大きな割合で小樽市はこれから取り組んでいくんだ、という話があったのですが、先ほどの市長のお話も踏まえて、また色々と考えて勉強させていただけたらと思っております。よろしく願いいたします。

永田委員 退職校長会の永田です。地域に帰りますと、この人口対策についての意識が非常に薄いんですね。じゃあどうしていかないといけないのか、ということで、今学校ではコミュニティスクールも始まろうとしております。地域で子どもをどうやって育てていくのか、今までは学校から地域に、家庭に頼んでいたのが、家庭で何ができるのか、地域で何ができるのか、そういうところを利用しながら人口対策について話し合っていないといけないな、と思っております。私も学校関係なのですが、学校関係の先生方もあまり危機感を覚えていないんですね。子どもが減るということは、学校がなくなるという、こういう危機感というのが、先生方と会っていても現職の先生と会っていても伝わってきません。そういった意味でも、できることは何なのかということ、やっぱり現場の学校・先生方と、家庭と地域と、考えていかないこれは解決しない

かな、と思っています。陰の力でこうして人口対策委員会を開いておりますが、皆様のお力が底力となって盛り上がっていただけたいな、と考えております。よろしくお願いいたします。

藤井委員 藤井でございます。本年2月1日から現職に勤務しております。以前は長らく市役所にいまして、企画政策室にも在籍したことがあって、人口対策に携わったこともあります。今この場で委員として、またこの人口対策会議に出席するということが、いいのか悪いのかちょっと複雑な気持ちでおります。委員の皆さんがおっしゃるとおり、人口対策と言っても日本全国が人口減少している中で、もし小樽だけが増えたとしても所詮奪い合いみたいな話になっているので、果たしてそれでいいのか、というのが私としては一つ大きいかな、と。あとは他都市と比べて人口減少率が激しいという中で、子ども達の声が聞こえないというのは、街の活気としてもやっぱり新陳代謝がだんだんなくなってきている、と。自分自身の体でも若い頃と比較して、年取ればやっぱり新陳代謝がなくなるように、小樽の街も、一時期の若かりし頃の青年期から壮年期、そして老年期に入ってきているということを考えれば、ある意味致し方ない部分もあるのかな、という気もしてはいるんですけども、小樽という街がこれからも活気のある程度維持していくためには、若い人の力、そういうものをもっともっと活用していかなければならない。ですから人口減少とか高齢化とかいろいろ言っている我々高齢者は、若い人達を後ろから活気づける、「そんなこと」「何やっているんだ」みたいな話で上から目線で言っているうちは、なかなか若い人も居ついてくれないのかな、と。そういう部分では、人口減少の問題というのは、高齢者、我々自身の意識改革もしないと、根本的なところでは良くなっていかないのかな、と自戒の意味も含めて考えているところです。初めてこういう委員の席に就かせていただきましたので、いろんな意味で皆さんの意見もお聞きしながら、私自身が日頃から考えているような意見も述べさせていただければな、と思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

佐々木委員 連合北海道小樽地区連合の佐々木でございます。昨年度に引き続きまして、委員の委嘱をいただきました。私の立場からすればこの会議は、小樽市における労働環境、雇用環境などの視点を強く意識しながら、参加をしていきたいと思っております。いい意見を導きだせるような議論を、皆さんからの意見も学習しながら参画をしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(道新) 鈴木委員 北海道新聞の鈴木徹と申します。7月に転勤して参りまして、その転勤した際の挨拶状には「住んでよし、観光してよし、小樽はそういう街ですからぜひ遊びに来てください」というふうに書きました。これは素直にそう思いました。北海道新聞は全道各地津々浦々、主要都市には支社があって報道部があるわけですが、中でも最も人気がある、あそこに行ってみいたいというのが小樽報道部でありまして、仕事もしやすい、夜お腹が空いたねと言ってすぐ食べに出られる支社って、今本当にないんですよ。北海道新聞の支社ってほしい街なかにあるんですけど、その周辺でも、夜食べ物屋さんが開いてないというところが大半です。皆さん悲観的なお話もありましたけれども、私にとってはこの街はとっても輝いて見えています。札幌に近くて吸収されている部分もありますけれども、逆に札幌に近いというのは非常にメリットではないかというふうにも思います。コロナの影響でライフスタイルが変わっていきます。それをきっかけに、この街がもっと素晴らしい街といえますか質の高い街になっていく、そのきっかけに立ち会えたらと、そんなふうにも思っております。よろしくお願いいたします。

(公募) 鈴木委員 昨年に引き続きまして、市民公募委員としてこの会議に参加させていただくことになりました。これを機に、人口問題について色々勉強をして、また少し

はお役に立てたら非常に嬉しいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

小山委員 副市長の小山でございます。本当に今日はお忙しい中、ご出席いただきありがとうございます。また日頃皆様には市政全般にわたって様々にご協力いただいていることを感謝申し上げます。この会議が、皆様の知見を合わせてですね、よりよい実りのあるものになるようにと祈っております。どうぞよろしくお願いいたします。

鈴木座長 このほかに、北海道財務局小樽出張所所長の島尻委員と、市民公募委員の吉川委員、吉川委員は花園銀座商店街で食器店を営んでおられるわけですが、この2名の方が急遽都合が悪くなりまして、本日欠席となっております。それでは議事に移って参ります。

鈴木座長 <議事(1)第1期小樽市総合戦略の平成31年度実績について、事務局から説明を求める>

事務局 <資料1、1-1、1-2、別紙、1-1抜粋版に基づき説明>

鈴木座長 <事務局からの説明に対し、意見や質問を求める>

鈴木座長 安心きずなプロジェクトは非常に低調な感じで数値が悪化しているんですけども、前年とあまり変化がないのでとりわけ抜粋した資料は作らなかった、ということですか。

事務局 そうです。

鈴木座長 安心きずな再生プロジェクトは、まちづくり、防災、或いはコミュニティセンター、そういったものの使用率ですとか、そういったところの指標だと思いますけれども、やはり財政的な面も影響しているんでしょうかね。備蓄品の整備なんかは購入すれば済む話ではないかと思うんですが、これがうまくいかないのですか。

事務局 資料1-1の33ページ上段、避難所の機能強化事業ということで、災害発生時の避難所の受け入れ強化のために備蓄品を整備する事業ということで、避難所の備蓄品について74%から100%に引き上げていきたいという事業でございますが、これが80%弱くらいでとどまっているということで、担当に聞いたところ、それぞれのところで80%しか備蓄できていない、というわけではなくて、スペースの問題で、この避難所には備蓄できないとか、そういったスペースの問題を解消できていないがために備蓄ができていないというふうに聞いております。

鈴木座長 避難所というと代表的なところは学校ですか。

事務局 学校もありますし、町内会館を指定させていただいているところもございます。

鈴木座長 学校はもともとそのようなスペースを考慮して建てたわけではなかった、ということでしょうか。新築の場合は違うのでしょうか。大学でも確か体育館に備蓄スペースを作って備蓄しているんですけども、スペースを取ることができない、というところが影響しているということですか。或いは避難支援体制の防災体制なども、これは別にお金のかかることではないのかもしれないんですが、やはり現実低調になっているというのは人手が回らないということなんではないでしょうか。

事務局 32ページの56番の事業ですね。こちらのほうは、ハザードマップを整備していく、というところで進捗を測ろうとしているものでございまして、ハザードマップのところで土砂災害のところと津波の関係と河川の関係と3つ、ハザードマップの種類があるそうなんですけれど、津波と河川のほうはハザードマップは完成しているようです。ただ、土砂災害のハザードマップのほうで、目標は100%ということで掲げているんですけども、土砂災害のハザードマップを作る前に、土砂災害の警戒区域の指定という作業が必要で、それを行うためには地元住民の理解を得ながらやっていくということで、そこの指定の協議が整っていないためにハザードマップまでいけない、と聞いております。なので市の職員のマンパワーなり経費をかければ全部できるかということ、そういうものではない、というふうに聞いております。

鈴木座長 これはなかなか、確かに住宅地がいきなり危険地域に指定されるとその住民は不安になるということで、難しいところがあるんでしょうね。

(公募)鈴木委員 あずましい暮らしプロジェクトの移住促進事業で、各年度の移住世帯数を合計すると、6年間で42世帯ほどになると思うのですが、その後のこの方たちの定住状況というのは把握されてますか。

事務局 その後までは追ってはいないです。中には残っている方もいらっしゃいますし、またどこか違うところに転出された方も中にはいらっしゃいますけども、それが何人くらい残っていて、何人くらいさらに違う街に行かれたか、までは追い切れていません。

(公募)鈴木委員 例えば、便宜を図ったりすることがあるかと思うんですが、1年なり2年なりは小樽にいてくださいよ、とかそういった縛りはないのですか。

事務局 今移住の関係で、例えば家賃補助をしますとか、土地を差し上げますとか、住宅取得の補助をしますとか、現状で制度は若干ありますが、それを使って移住された方というのは、まだ小樽ではいらっしゃいません。ですので、移住をしてきたから市として何か支援をするというのは、小樽ではない状況です。ここの資料で移住世帯数というのを出していますが、移住と転入の違いというのを把握しきれない、というところがございまして、私どものほうで移住ワンストップ窓口という名称で移住のご相談を一元的に窓口として受け付けております。そういったところでご相談をいただいた方のうち、小樽に越してきた方が各年度でこれくらいいらっしゃるという拾い方をしています。質問とお答えがずれてきているかもしれませんが、そういったところでご理解いただければな、と思います。

鈴木座長 移住ワンストップですから、手間が省けるということなんでしょうね。窓口が一つということ。

事務局 例えば住むところですか、お仕事の関係ですか、小樽市のこの辺の地域ってどういうところなの、ですとか色々なご相談がありますので、仕事ならあっちの窓口、住むところならあっち、ということではなくて、まずいったんお話をお伺いさせていただいて、ただし専門的なところになりますと私どもで対応しきれないところがありますので、そういう時には担当の部署のほうにお繋ぎをして、より専門的な相談をしていただく、ということをやっております。

鈴木座長 普通に転勤になったから、このワンストップ窓口に相談しに来た、という方もいるんですか。

事務局 中にはいらっしゃいます。旦那さんが小樽市内に転勤になったので、この地域って

どうなの、というご相談をされる方もいらっしゃいます。

杉山委員 樽っ子プライド育成プロジェクトの中の、地域子育て支援センター事業の施策KPIが利用親子人数となっているんですけども、これは本当に子どもさん自体が少なく、目標値がもしかしたらそもそも無理があるのかな、というのと、利用するというのを、満足度みたいなものに変えたほうがまだ、達成しやすいのかな、というのは素人考えですが思いました。現状分析にも書いてあったんですが、民間の保育園さんのプレ保育みたいなものもすごく増えていますし、公共的なところに足を運べる親子さんが本当に少なくなっているのではないかな、というのは私たちのボランティア活動をしていてもすごく感じるところで、そもそも小さいお子さんをもてるお母さんも働いている、そういう現状が多くある中で、利用人数というのはもしかしたら少し無理があるのかな、という気が、素人考えですがしました。

事務局 これは当初5年前に作ったときに、これが指標としてはいいのではないかと、いうことで担当課のほうで考えて作ったものですが、確かにお子さんの数が減っていく中で利用者さんを増やすというのは無理があると言われれば無理がある指標だったのかもかもしれませんけれど、当時はたぶん、高いところを目指さないとなかなか利用者さんも、ということでこういう設定をしたものだと思います。この後子育ての関係で色々この総合戦略に限らずですね、市の計画の中には指標を持って進捗を測っていくというのがございますので、今いただいたご意見については、子育ての担当部署のほうには伝えさせていただこうと思います。

鈴木座長 その上の、環境充実ですか、これもかなり数字が下がってきていますけれども、これは何か理由があるんでしょうかね。

事務局 22番の保育環境整備事業ですね。ちょっとそこまでは把握しきれていませんでしたので、冒頭にご説明しましたとおり、議事録の確認を皆さんにお願いいたしますので、その時に合わせて、担当課のほうからどういった理由でこういう数字になっているのか事情を聴きまして、情報提供のほうをさせていただきたいと思います。この場では申し訳ありませんが、把握しきれておりません。

鈴木座長 回というのは、何を1回と勘定しているんでしょうか。

事務局 読み聞かせですとか、そういった活動の回数だと思いますが、そこも合わせて確認しまして、議事録確認の際に情報提供いたします。

鈴木座長 学校での音読活動というのは、小樽の小学校はかなり進んでいるんですね。ほとんど全ての小学校で音読活動をやっているんじゃないかと思うんですけども。

事務局 音読の関係ですと資料1-1の10ページ、16番の音読推進事業で、全ての小中学校で実施している音読活動の充実を図り、児童生徒の学力向上を推進するというところで、これは家庭学習するということこそを指標として、音読推進のところを測っているところがございますが、こちらのほうはスコアとしましては、やっている子どもを50%から70%に増やしていくよ、というところで、スコア30なので低いですけれども、前進はしてきているということがございます。現状分析としましては、音読カード、テンプレート集を配布して、音読カップをやるですとか、こちらのほうは小中学校の取組でございますが、一定程度進んできているということがございます。

鈴木座長 KPIのところは、1時間以上家庭学習する児童生徒と書いていますよね。

事務局 音読の関係を家庭でやってきていただけないか、というところで、なかなかその、座長のおっしゃりたいことはわかるんですが。

鈴木座長 他の学習じゃないんですか、これは。

事務局 他の学習も含めて指標は取っているところです。家庭学習の中に音読も推進してお願いをしていく中で、音読だけで指標を取るというのがなかったのがなかったので、この指標を代替えとして採用させていただいているということです。

鈴木座長 教育委員会の報告を見ているんですけども、確か全小学校で音読活動を取り入れた、という押さえでいるんですよね。そういう意味では、音読推進事業としてはそっちを入れたほうがいいんじゃないか、という気がしないでもないですね。家庭学習というのは別な項目を立てたらよろしいんじゃないか、と。そんな気がいたします。

鈴木座長 <議事（2）第1期小樽市総合戦略の総括について、事務局から説明を求める>

事務局 <資料2、2-1、2-2に基づき説明>

鈴木座長 <事務局からの説明に対し、意見や質問を求める>

佐林委員 実績それから数値についてはよく理解できました。ただこれ、検証ということも必要なんですよ。そうしたときに、実績といいますか数値の上昇したものの方がより効果的なものであったのかとか、先ほど杉山委員がおっしゃったように、この数値については満足度のほうがいいのではないかとか、そういうような検証だとか、冒頭に市長がおっしゃったと思うのですが、このKPIの中で数字は達成していないんですけども、もっとやらなければならない場面があるのかとか、それともそのKPIについては残念ながら必要な項目で削除するのだとか、やはりそういう検証というのが必要で、それをもとに第2期の戦略に入れていくということなんだと思うんですけども、この辺はいかがでしょうか。

事務局 2期戦略については、小樽市の第7次総合計画というのが同時に動いておりまして、その中で人口減少に対応する、というところがございますので、そちらの指標を多く採用させていただいているというところがございますが、このKPIを挙げると当然その事業は進む、というのは当たり前なんですけれど、そこがどう人口に効いてきているのか、というのが正直何をもって判断をしていけばいいのかな、というのが悩ましいところだと思っています。ですので、そこの兼ね合いと言ったら変ですが、そういうところも合わせて考えさせていただいて、今2期戦略というのがこの7月からスタートしていますが、作ってコンクリートだとは思っておりませんので、必要なものがあれば追加をするのがいいのか、今のものと入れ替えるのがいいのか、というのはちょっと考えさせていただきたいと思います。

佐林委員 おっしゃっているとおりだと思うので、ぜひご検討いただきたいと思います。

鈴木座長 KPIにがんじがらめにされると、木を見て森を見ず、じゃないですけども、KPIの達成ばかりに躍りになってしまいますから、こちらの最終目標は人口対策ですから、非常にクリアな目標が設定されておりますから、それを常に見据えたKPI設定が必要になってくるのではないかと思います。

(道新)鈴木委員 KPI全体の4つのプロジェクトの中で、資料2にある市民幸福度ですか、

小樽という街が幸せに暮らせる良い街になっていくんだ、という意味では全て非常に意味のあるプロジェクトですし、KPIにも価値がある、KPIで管理していく、ということでもいいと思うんですけど、これが上がっていったら人口の減少が食い止められて、場合によっては増えていくんだということが、どうにも結びつかないんですね。つまり幸福度が高ければ人口が増えていくのであればですね、逆に言えば大阪とか東京みたいなところがみんな幸福だ、ということになってしまいますね。人口が減っていても、それはそれで幸せな街になるという選択肢もまたあるわけですよ。総括ということですから、聞屋っぽい嫌な質問になってしまいますが、なんで小樽は減っているのか、逆に言うとなんで千歳とか江別とか恵庭は増えていて、小樽は負けてしまっているのかと、そこを総括してもらいたいと思うんですね。人口の動態ということで見ると、もうちょっとエリア別ですね、たとえば銭函だとか、あの地域は完全に札幌のベッドタウンになり得るエリアですよ。その地域と朝里とかですね、小樽の中心部と山あいと、それぞれ属性が違ってくるわけで、座長がおっしゃったように人口という非常にクリアな目標が設定されているわけですから、ひよっとするとエリアによってもっときめ細かく何か対策を打っていったほうがいいのかも、という気がします。小樽市全体のKPIからはなかなか見て取れませんが、総括もなかなかしにくいのではないかな、というふうに思います。幸せな街を作っていく、という意味での総合戦略だと思いますので、それとはまた別の人口減少対策としての何かこう、KPIのどれを切り出せばいいというのではないかもしれないですね、何か具体的なもうちょっと効果的な施策と、効果的というのは直接的な効果が見込める施策と、そのKPIみたいなものが必要なんじゃないかな、という印象を持ちました。以上です。

鈴木座長 幸福度っていう、「幸福」という言葉が入るので非常に誤解を招くのかもしれないな、という感じなんですけれども、幸福度というのはほかの街でも採用しているんですか。

事務局 何市かはございます。東京23区の荒川区だったかろう覚えなんですけど、もっと細かな指標群を用いてやっているところもございまして、国のほうでも試案的なかつとしたものではなかったと思いますが、幸せ云々ということで検討している案みたいなものは出てきていた記憶がございます。その中では、小樽市の市民幸福度と名付けておりますけれども、基本目標1・2、その中で測るということで、指標としては30～40くらいの指標群で測ることになっておりますけれども、もうちょっと幅広い指標群で測っている街はございます。

鈴木座長 そういうところではまた、別な点数が出ているというような。

事務局 そうですね。ですのでそういう街でも「市民幸福度」という同じ名称を使われているのかもしれませんが、中に含まれている指標が異なるというところがありますので、横との比較はできないのかな、と。

鈴木座長 平成29年で、100点満点の1.67と言ったらまるっきり不幸みたいな感じになってしまいますもんね。

事務局 これもですね、考え方なんですけれども、指標を計算する中で基準を下回ったものをマイナスの点数をつけて、それで食われちゃっている、ということも中にはあるかと思うので。それも含めまして当初、これで測るんだということでやらせていただきましたので、そのままにしてございますけれども、他の街とかを見ますと、進んでいないものは0点だと整理しているところもありますし、そもそもこのように指標群を全部足して平均を出していない街も、10個のうち5個は達成して、残りの5

個は前進しているよ、という整理で終わっている街もございます。

鈴木座長 <議事（3）第2期小樽市総合戦略について、事務局から説明を求める>

事務局 <概要版に基づき説明（第2期戦略と人口ビジョンの冊子も配布）>

鈴木座長 <事務局からの説明に対し、意見や質問を求める>

鈴木座長 今回は基本目標になったんですね。前はプロジェクトでしたが。

事務局 1期目の作りは基本目標があって、それに紐づく重点項目というのがございました。1期戦略はお配りしてないので、皆さんのお手元にはないんですけども、基本目標の中味をミックスした中でパッケージとしてまとめたのがプロジェクトという見せ方を、1期目のときはしておりました。その中で、議会の議論等でもあったんですが、このプロジェクトが基本目標にどのように繋がるのかというのが、ちょっとわかりにくいというご指摘がございまして、この2期戦略のほうにつきましては一本道と言いますか、この事業はこの施策この基本目標に繋がるんですよ、というのをわかりやすくするために、このように縦割りと言ったら変ですけども、整理させていただいたところです。

鈴木座長 1期にも基本目標はあったんですけども、ということですか。

事務局 はい、あったんですが、1期の基本目標を達成するのが、例えばあずましい暮らしプロジェクトの1, 2, 3とあんしん絆の7, 8と、というふうに非常に多岐にわたっていたものを、プロジェクトという一つにまとめていたものですから、ちょっとわかりにくいというご意見がございまして、今回はそうではなくて一本道のような形で整理をさせていただいています。

鈴木座長 そのかわりSDGsが入ってきたんですね。

事務局 はい、これはSDGsもいろいろな目標がございまして、関連性をまずお示しをして意識づけをしたいということがございます。SDGsも指標が200いくつだとかあったと思いますけれども、地方版の指標を作るところまでは、SDGsで言うところのそういうものがあるんですけど、ちょっとまだそこまでは踏み込めておりませんが、まずは意識づけということで、付けております。

(公募)鈴木委員? 戦略の21ページのところなんですけども、子育て世帯への市営住宅の供給とありますけれども、具体的にどういうことを想定されていますか。

事務局 街なかの借り上げの市営住宅という制度がございまして、市営住宅を1棟作るのではなくて、空いているアパートですとか、マンションですとかのワンフロアを借り上げて、それを子育て世帯の方に市営住宅として提供したいという事業がございまして。先ほどの戦略の実績のところにもあるんですけども、なかなか要件が厳しいということで、合致する事業者さんの手がなかなか挙がりにくいということで。ちょうどこの資料1-1の1ページ、既存借り上げ公営住宅事業というところでございまして、こちらを使って子育て世帯の方に市営住宅を提供したい、という事業がございまして。

(公募)鈴木委員 実際それはあるんですか。

事務局 今は4戸あります。平成29年度に制度を作りまして、実際に契約をさせていただいて、市営住宅として4戸スタートしたんですが、なかなかそこから30年度新規のプラスアルファの部分があったところでして、31年度、昨年度ですね、要件を緩和しまして、築年数ですとかそういったところを緩和したんですけども、それでもちょっと申請いただけなかったということで、今は29年度の実績のところに留まっているところです。住宅担当と前に話したところ、なかなか厳しい状況だというふうには聞いておりますけれど、今イメージしているのは、子育ての世帯の方向けに1棟作ってということではなくて、そういうことで街なかで子育て世帯の方に市営住宅を提供できれば、という取組になっています。

鈴木座長 既存の市営住宅は空きはないんですか。

事務局 いや、空きはございますけれども、中心部はなかなか空いていないと思います。

鈴木座長 周辺部か、或いは空きがあっても老朽化しているとか。

事務局 老朽化しすぎるとそこは募集していないというところもありますけれども。

(公募)鈴木委員 小樽の家賃は高い、という声がありましたよね。なのでこういった中心部に住んだときに家賃補助ということがあるといいのではないかなと思うんですけども。

鈴木座長 市営住宅の家賃が高いんですか。

(公募)鈴木委員 小樽の民間の家賃です。既存の市営住宅でないところのですね。ですから、業者と契約をして市営住宅として提供するときに、家賃もある程度軽減するよな、そうするといわゆる子育て世帯の支援になるのかな、と思いますね。

事務局 この制度で借り上げたものは、市営住宅として利用しますので、それはほかの市営住宅と同じ基準で家賃のほうも設定になりますので、それはこの制度に限って言えば対象にはなっているのかなと。

鈴木座長 この会議で以前に話題に上ったんですけども、小樽の家賃は高いんじゃないか、と。札幌と遜色ない。そこらへんが江別とかなり差がついている、と。だから住人は江別を選ぶ、と。札幌に通う場合には、というところで、実は一度調べてもらったことがあるんですが、そうするとそんなに小樽は高くないという数字が出てきたんじゃないかなかったですか。

事務局 住宅何調査だったか、それで見ますと、平米数と家賃の関係を見ると、例えば2LDKで比べると、とかいうやり方で見ると、そんなに大きく札幌に比べて高いですとかそういった数字は確か出てこないんですよね。築年数と交通利便性と、というのを色々入れていくと、小樽の家賃は高い、と言われるのはあります。

鈴木座長 そうなんですよ。旭川やなんかと比べても高い、と。

高橋委員 相対的な感覚なんですよ。要するに小樽に住んでいけば所得が低いわけですから、札幌の所得で考えると、所得に占める居住費が高い、と。そういうことも考えられますよね。商大と共同研究で30年に出した本の中でも、所得に関してはハッキリ

書いてますから。ですから、居住費が高いよりも、所得が低いほうが問題だと思います。

鈴木座長 なるほど。

高橋委員 それと、地元定着を目指す高校生がまた40%に落ちましたね。おととしが46%で、去年が40%という形で、これは毎回言っているんですが、小樽市内の企業はほとんど99.9%が中小企業ですけれども、そちらに高校生がもし求職するときに、中小企業に何か助成金を出せないか、と。昔あったんですよね。それが今やっていないものですから。そういう形ですね、インセンティブを与えて、少しでも地元に着するよう。高校生というのは、その後大きくなって子どもを産んでいく世代になるわけですから。10人いるうち4人しか小樽に残らないわけですよ。これは非常に大きな問題だと思います。

鈴木座長 高校生の数自体がどんどん減ってきていますからね。出生数が1年に500人を切っていますから。高校の定員数も今500以上いるんじゃないかな。これから高校も縮小していくことになるんだと思いますが。

(道新)鈴木委員 2期戦略の28～29ページに、東京圏からの移住支援を行います、とあるんですが、この東京圏に絞る理由というのは。

事務局 これはですね、国の地方創生の交付金で、UIJターン移住支援金ということで、東京23区在住在勤で、直近10年のうち5年以上いた方が、北海道に移住して北海道が開設するマッチングサイトに登録されている企業に就職をした場合、世帯100万円、単身の場合は60万円、という制度がございまして、小樽も実施しているものですから、あえて「東京圏からの」ということで入れております。

(道新)鈴木委員 重点事項という大きな目標として掲げるときにですね、なぜ東京圏と絞るのかな、と素朴な疑問があったので。大阪でもいいじゃないか、と。仙台でもいいですよ、と。先ほどテレワークでもいい、ということで、東京の会社でもいい、ということでしたよね。だったら札幌の会社じゃなんでダメなんだろう、と。この全体を見て、あらためて私を感じたことはですね、小樽ってやっぱり札幌のベッドタウンになるのが嫌なのかなあ、と。それはこの街のプライドをすごく傷つけてしまうことなのかな、というような感じを持ったんですけども、逆にですね、こう考えたらどうかな、と。私の先輩で北海道新聞に勤めている方で、その方は小樽が好きで、南小樽駅の近くのマンションを買ってそこから（札幌へ）通っている人がいるんですよ。その人は小樽に勤務して、小樽がすごく気に入って、それで家を買って通うようになった、と。これっていいことなんじゃないかな、と思うんですよ。逆に私は小樽に転勤するときに、「小樽なら（札幌から）通えますね」と言われたんですよ。いやいや引越しますよ、と言ったんですけど、逆に小樽に仕事を持ちながら、札幌が小樽のベッドタウンでもある、という側面があるんですね。そういう意味で、この東京圏というのをきっかけに思ったんですけども、もうちょっと札幌に仕事を持ちながらこちら（小樽）で暮らす、こちら（小樽）で子育てをする、そういう意味での暮らしやすい街、というものを一つ施策の柱に打ち出すだけで、小樽の印象はものすごく変わっていくんじゃないかな、という気がしました。今回、この総合戦略の中で打ち出すのがいいのかわかりませんが、こういうことも考えてみてはどうかな、と思いました。

佐林委員 私は今回の総合戦略は、個人的によくできているなと思っています。この総合戦略

は7月1日にスタートしておりますが、現在、コロナの感染症拡大で事業の継続と雇用の確保、それに伴って生活に及んでおります。総合戦略では、小樽市に仕事をつくり安心して働けるようにするという基本目標がありますが、アフターコロナを見据えて総合戦略の見直しも必要ではないかと思えます。

鈴木座長　今お話にありましたけれども、小樽がベッドタウンになることをどうも躊躇しているんじゃないか、というご意見ですけれども、私も最初はそういう感覚を受けました。実際のところ。ですからこの人口対策において小樽市は、産業をいかに持ってくるか、とそれにもものすごく重点を置いて今までやってきたんですけど、銭函なんかの工業団地として開発していこう、というときに色々誘致しようとしたんですけど、なかなか上手くいなくてですね、まあそういう意味では、住みよい街というところを模索していくという、そしてある意味札幌に通う人たちの住まいの場としての小樽というのも考えていけないといけないのかな、というふうに私も考えてございます。札幌の間には星置とほしみという駅がありますけれども、星置は成功したという感じですが、隣のほしみは小樽ですよ、星置は札幌なんですけど、あの違いというのは愕然たるものがありますよね、列車から見てもそうですけれども。やはりあそこらへんが鍵になるのではないかな、という気も私はしております。

それではそろそろ時間も過ぎておりますので、最後に皆様一言ずつ頂戴して会を締めたいと思えます。余裕もございませんので、おひとり様1分程度でお願いしたいんですけど、それでは樋口委員のほうから一言いただけますか。

樋口部長　私もこの第2期の総合戦略の策定委員として担当しましたので、この中味についていろいろと言うのは言いづらい立場ではありますが、一つ事務局の方をお願いしたいことがございます。確か2期を作るときに一度データか何かで見せてもらったような記憶があるんですけども、今色々議論に出てきましたデータの収集・分析、特に人口減少に当たってですね、なぜ小樽から出ていくのか、それと逆に、なぜ小樽に住もうと思ったのか、そここのところをしっかりとデータを収集して分析したほうがいいのかなと。これは2期の実績をカウントするときにも必要になってくるのではないかと。例えばなんですけど、引っ越しのときって市役所に住民票の届け出を出しますよね、これは個人情報なので任意なんですけど、協力してくれたら500円の市内で使える券をあげます、とか、そういうことで、このアンケートに答えてもらえませんか、と。どういう理由で引っ越してきたんですか、何年住む予定ですか、と。名前はもちろん記入はいらなないと思えますけれども、ハガキか何かを渡して、そういうのを例えばやってみるとか。これは私の思い付きの提案なので、どうしてもやってくれというものではないですけど。例えばそうやって出る人、入って来る人の動向と言うのをしっかりと把握して、小さな町とか村だと窓口で喋るとすぐわかるんですけども、小樽だとなかなかそれはできづらいと思うんですけど、何かそういうことで人口の出入りの理由をしっかりと把握していると、今後の展開に役立つのではないかな、と思いました、

竹田委員　人口減少ということで、人口減少を抑えるためには、単純に言うと移住されてくる方を増やす、若しくは新たな子育てしやすい、お子さんが生まれる、という環境を考えたら人口減少は抑えられるのかな、と。そんな中で、私自身もそうですけれども、札幌から通っているんですよ。私どもの職場の職員、正規職員はほとんどが札幌から通ってきているような状況です。そんな中で、敢えて小樽に住んで、小樽に勤めたい、というようなことを考えた場合、やはり住みやすく魅力のある職場、単純に仕事を持って企業を誘致しただけでは、人口の移動までは結びつかないのかな、というような気がいたします。そういう方向性も必要なんじゃないかな、ということを感じたところでございます。

佐林委員　先ほどご説明のありましたテレワーク、リモートワーク、それからサテライトオフィ

スですか、これは移住というキーワードがあったのでぜひ進めていただきたいと思います。以上です。

高橋委員 佐林委員も言っていたんですが、要するに今の計画というのはコロナの始まる前に立てたものですよ。ですから当然、企業なんかもそうなんですが、変化に対応した、これはもう非常に大きい変化ですから、そういう計画の練り直しが必要じゃないか、と考えています。それに絡んでですね、観光都市小樽という、産業の中心の観光がですね、もうこういう状態ですから、外国からはインバウンドはほとんど望めない状態ですね。ですから国内、若しくは道内、観光を回していくという、そういう視点に立ってほしいな、と。これは原発の事故とき、東北の大地震のときは外国人はほとんど来なかったですよ、特にヨーロッパ人は。そのときは、北海道は富良野だけが賑わっていたんですね。それはもう道内客がほとんどでしたから。そういうことも考えて、国内・道内にも観光の軸足を据えて考えてほしいな、と考えております。

小倉委員 私も高橋委員と同様で、この計画自体コロナの前に作ったものということなので、平時であれば特に異論はないんですけども、状況が変わってきていることを踏まえると、計画がこのままいいのかな、と思うところはあります。我々も支店を運営していくにあたって、今年度に入る間に、今年度の方向性を決めて行動計画を作るということをやっていたんですけども、それが出来上がった途端にコロナになって、これも変えていっています。ということなので、これに関して形式的に変える・変えないという議論はあると思いますけれども、例えば運用の面で出来ることはやっていく、というのもありのかな、というのがあります。具体的にいうと、例えば企業誘致、これに関して言えば課税免除等による、ということが書いてありますが、このコロナになって、地方にとって良かったことっていうのは、企業が移転を始めている。ニセコも確かルピシアという紅茶の会社が来て、淡路島にも確かパソナでしたか、大手が行ったりしている、と。それは地方にとってはある意味チャンスなので、この時期じゃないと生かせないとおもいますので、ぜひそういう活動もしていただきたいと思います。以上です。

岡部委員 せっかくの機会なので、今起きている事象を少し。取引のある不動産屋さんなんですけれども、ここにきて500万くらいの中古の物件をですね、売り始めている、物件も見ないでお金を振り込んでくる、と。じゃあどんな人なんですか、と聞くと、4、50代で、やっぱり観光で小樽に来たことがあって、このコロナの関係があって、東京だとか関東圏の人らしいんですが、関東圏にも住居を持ちながら、何かあったらこっちにも来たいよね、遊びたいよねと。そういう形で現実問題動いているらしいです。そこでこれを読んでいて思ったのが、せっかく地域版DMOですか、これ近々設立ということであれば、その辺との親和性が高いと思うので、何かひっかけてですね、そういった方達を呼び込むといったことも、もしかしたら基本目標の2にもちょっと該当するのかな、ということを感じました。以上です。

沼田委員 先ほど道新の鈴木委員と鈴木副学長がおっしゃった、パンドラの箱を空けちゃったかな、というか、札幌のベッドタウンという話ですけども、今日は人口対策会議ですので、基本的には私もそっちの考え方が強いんですけども、せっかく小樽商大さんと共同研究をされていて、共同研究の中にも、この資料（戦略）の7ページにもあるんですが、札幌の近郊の住民が居住地に求めているもの、ということで、小樽商大さんがちゃんと分析をされているんですね。じゃあそれを見たときに、江別とかよりも優っているものって、小樽ってたくさんあるんだと思うんです。そこを、小樽商大さんが調べてくれたものを比較して、江別に勝っているものってたくさんあるわけですから、そこを伸ばしていく、そこに磨きをかけていくというような施策を取るというのが、この人口対策の一つじゃないかな、と思います。ここから札幌に仕事に出る、

ということが進んでも、別に小樽の歴史と伝統が崩れるわけではない、と思います。

杉山委員 全く個人的なことですが、私は生まれも育ちも道外です。約30年近く前にこちらに移り住んできたときに、私の出身は本州の割と小さな城下町なんですけれども、小樽の人口とその街の人口はほぼ同じ16万人でした。私の田舎は未だにそんなに減っていないんですね。15万人台にはなっていますけれども。本州という大きな繋がりがある中で、全然違う話なのかもしれないですけども、小樽がここまで減ってしまう要因って何だろうって、ずっと考えていて、私は本当に個人的にはわからないんですけども、地元の人、私の短い人生でも小樽が一番長いんですけど、小樽好きです。だけれども、それを、人口を減らさないような方向に生かしていける、っていうのがなかなか施策として出てこないな、というのがいつも思っていて、私は自分が考えてもわかるわけではないんですが、人口対策ということで、増やす、というよりもっと魅力に気づいてもらって、もっと近くの人たちを呼び込めるような何か魅力の再発見みたいなのを地元からもっと発信を、今の時代だからこそ広く発信していける策があるのかな、と取りとめもなく考えていました。

永田委員 頑張っているのに人口がどんどん減るということ、これが現実ですね。学校関係としましてはですね、やっぱりそういう減っていく子どもたちに、小樽をふるさととして心に留めてほしい、というのがあります。じゃあどうするのか、というところ今親というのは自分の子どもが良ければ、という親が多いんですね。これは町内会にも関係すると思うんですけども、親どうしの繋がりが少ない、見ていると、小学校1年生に上がる親が、高学年の子がいる家に、「今度一緒に連れて行ってね」と、こういう会話が欠落しているのかな、と。親はどうするか。学校まで送っていくんですね。それは、子どもを育てるといことはやっぱり、そういうところに入れさせて、子どもが育っていくという。あんなことしたな、こんなことしたな、という思い出のふるさと。じゃあどうするのか、というところ町会の働きがなければなかなかできないのかな、とこう思っています。私は今最上町に住んでいるんですが、ある地区では毎朝親が自分の子どもがいなくても集まってきて、そして「いってらっしゃい」と送り出す、こういう地区があるんですね。ほんの一部ですけども。ああいうことは、町会ではできないのか、ということ私はずっと叫んでいるんですけど、なかなか。自分の子どもはもう子育て終わった、と。関係ないんだという親がすごく多いんですね。だからやっぱりそういった面では、学校としては親を育てる、という。もちろん子どもの学力を上げて育てるのも大変ですが、親も育てて親を通しながらそういった子どもを育てて、ああいうことやったな、こういうことやったな、と。小樽を去った子どもが、小樽をふるさとにしたい、と。これは絶対減っていくんですけども、そういう心のふるさと、私は非常に大切にしたい、と。これは絶対減っていくんですけども、そういうふうを考えております。以上です。

藤井委員 私は初めてこういった席に出させていただいて、ちゃぶ台返しみたいな話になってしまうんですけども、小樽市の総合戦略は別に人口減少に歯止めをかけるために作ったわけではなくて、小樽の街を元気にするというか活性化する、結果として人口の減少も若干弱まるかも、みたいな形のイメージなのかな、と。そうでないと、人口ビジョンというまた別の冊子を作っているわけだから。そういう認識でいいのかな、というのを私は確認をしたいのと、これは人口対策のための総合戦略ではない、と。結果として人口減少に歯止めがかかるかもしれない、という、あくまでも人口減少対策のそれは結果論、それとも歯止めをするための総合戦略なのか。ちょっとそこらへんが、この文章の中だと言葉が悪いかもしれないがどっちつかずな内容だし、色々たくさん書いてる割にはKPIは2つしかないのに、KPIの前にはたくさんいろんな情報を書いていて、KPIは2つだけみたいな話だし。なんかそこらへんがすごく違和感を持っているんですが。本当は総合戦略は5ページくらいで、本当に効力がKPI

Iにはあるのか、という。迫市長も言っていたけど、それが上がったからって人口対策と結びつくというか、相関関係あるの？それがなくPIをたくさん作って進捗しています、と言っても自己満足にしか思えないんですね。だからもうちょっと小樽の場合は、他の都市と違って2,000人ずつ減っているから切迫感と言うか危機感というのかな、他の都市の何十倍も持たないとならないんだから、あまりほかの都市で作るような総合戦略を作っても、それは国の顔もあるから作らなきゃならないのかもしれないけれども、それとは別に小樽としてはお金も人もないんだから、どこに充てるんだ、と。今でいうテレワークなら、テレワークのためにここでやるんだ、と。そこにお金も人もつぎ込むんだ、という一極集中にして、本当に効果があるかどうかはまた検証していくという形にしていけないと。いつまでたっても立派な本は作れるけれども人口減少は今言ったように2,000人ずつ減っていきますよ、となっちゃうんで。企画政策室の皆さんとか市の職員は一生懸命夜遅くまで仕事して、なんか「利益なき繁忙」という言葉がすごく浮かぶんだけれども、そういうことを長年やっている気がして、本当にこれでいいのか、と。他都市もおんなじことやっているわけだから。他都市とおんなじことやっていたらダメですよ。日本の人口が減っているんだから、奪い合いなんですよ、良くも悪くも。そうすると、他の都市よりももっと厚くすることをしないと。でも小樽は人も金も出せない。まして出し続けるなんてことは。だからどこで一つ絞るか二つ絞るか。やっぱりそういうものを作ってやっていかないと。僕はいつまでたっても2,000人の減少が、1,990人くらいに減るかもしれないけど、着実に減っていくというのは忍びないというか何というか、いいのかな～というのはありますよね。人間と同じで、魅力のある人のところに人は集まるんですよ。そういう人が集まらないというのは人間でも魅力がないということ。それは厳然としているんだから。それをきちんと押さえないと。ちょっと腹の括りがないように見えて。そういうのをやっていかないと、小樽が他の都市に勝ち残って、人口減少の歯止めをやるというふうには、なかなかいかないのかな、と。むしろそういうのは民間の人を含めてやるのがいいのかもしれないが。そういうのを作ってもこれしかないんだ、みたいな。ちょっとこのままジリ貧になっていって人口6万なんぼまでいったら。仕事はどんどん増えていっているわけだから。市の職員ばかり減らないということでは、それでいいのか、という話になるわけだから。じゃあ人口が減ったから職員減らしていいのかと言ったら、回らないわけでしょ。なんかそういう意味では、我々自身も含めて、危機感と腹の括り方をきちっとしないと、他の都市と同じことしていたら結局2,000人減るだけですよ、ということ、僕自身も自戒を含めて思っているから。何かそこらへん、迫市長を含めて腹の括り方を期待したいし、それに対する我々の腹の括りみみたいなものも見せていかないとダメかな、というのは今日初めて来て思いました。

佐々木委員 先ほどの議論の中で、鈴木委員が取り上げられておりました、東京圏からの移住支援については、すでに整っている制度ということで、小樽に当てはめれば東京圏から小樽に移住して、小樽で企業を興すということに対する支援策ということで、雇用の場が増える可能性はあるな、というふうに期待しているんですけど、先般、その追加施策みたいなイメージで受け留めたんですけども、東京に仕事を置いたままで身体だけ小樽に移住しても支援しますよ、という内閣府の考え方が出されていきました。身体だけ来ても雇用は増えないな、という残念感はあるんですけども、人口が増えるという可能性を展望すれば若干の期待は持てるかな、というふうに、まあ実施は21年度以降だというふうに言っていましたけれども、いずれにしてもそういった方々を受け入れる小樽の環境として、市の方でも指摘されていたテレワークの環境としてはまだまだ水準の低い位置にあるのではないかと、というイメージのお話をされていきましたので、そういった土壌を整えるといったことも進めながら、一方で移住の施策についても、他県他地域よりも一層、東京圏に向けたアピールを出していくことも策として必要かな、というふうに考えました。以上です。

(道新) 鈴木委員

今日はたくさん喋ってしまったので手短にします。不動産が高い・安いという話がありましたけれど、私も買ってみたいなと思って調べたんですよ。運河沿いの分譲マンションいいな～、ここ住みたいな～と思ったら、滅茶苦茶高いですよ。札幌より高いかもしれない。その一方で、山の奥の方一軒家、築30年、もうほとんどタダ同然じゃないかというくらい安いんですね。この差は何だろうなと考えたときに、自分が暮らそうと思ったらすぐわかりますよ。例えばですね、バス停まで何分歩かなきゃならないか、これ冬にこの坂道どうする、って考えたときに、とてもじゃないけど住む気になれない。ただですね、マイカーあればまだ運転しますから、パークアンドライドという発想ありますよね。どこかの駅にですね、ちょっと大型の駐車場を近くに作ってくれて、できれば無料、でなければ格安で月極めで借りることができたら、そこに住んで、駅までマイカーで行って、車をそこにおいて会社に通うみたいな、そういうライフスタイルができたらすね、これ買ってもいいな、というふうに思えるんですね。これは個人的な感想ですけども、そういうような施策、さっきも申し上げましたけれども、藤井委員がおっしゃるっとおりですね、本当に人口を増やすというプロジェクト、それだけに特化したような部局横断型のプロジェクトチームみたいなものがある、そういう個別の、駅の近くにパークアンドライドの駐車場作ったらどうだ、とか銭函で何か宅地にできないか、とかですね、そういうようなプロジェクトを考えてみたら効果が上がるような気がします。ぜひ、パークアンドライドやっていたら、1世帯増やすことは確実に私がいたします。よろしく願いいたします。

(公募) 鈴木委員

今日ここへ来るにあたりましてですね、「令和元年度版統計で見るとわが街おたる」という企画政策室統計グループさんの作った資料を見てきました。令和2年3月発行のできたてのものです。それで道内市町村の出生者数と死亡者数、そこだけ見たんですけど、それから引き算とかしましてですね、ちょっと資料を作ってみました。札幌でも死ぬ方が多いんですよ。道内で生まれる方が多いという市町村はないと思います。データは平成30年のものですが、それで死亡者数÷出生者数を計算しますと、小樽は1,905人÷479人で3.98、なんと約4なんです。死亡者数が出生者数の4倍なんですよ。それから平成29年に人口で小樽を抜いた江別は1,281人÷587人で2.18、北見は1,436人÷750人で1.91です。小樽は1,426人も減っているのに対し、江別・北見の人口減は600人台です。それから座長さんがおっしゃった、小樽をひたひたと追ってきている千歳、これはなんと780人亡くなって、生まれたのはなんと776人ですから、自然減がわずかに4人なんですよ。小樽市人口ビジョンの重点事項として、自然減が拡大しているから、社会減の改善でいくんだということでございますけれども、やはりこのあたりの分析というか、これをやっぱり踏まえないといけないかな、と思うんですよ。亡くなるのは仕方ないですよ、高齢化ですから。ですから出生者数について目を向けていく、と。小樽は平成30年で言うと、1,905人亡くなって、479人生まれている。生まれた赤ちゃんの4倍亡くなっていますからね。これはどう逆立ちしたって、増えるなんてことは難しいということ。しかしやっぱりこのへんのことを、小樽市人口ビジョンの軸足をですね、社会減のみならず自然減にも置く、ということで要望いたします。

小山委員

大変長時間にわたり、熱心なご意見をありがとうございます。色々ありましたように、コロナの前に作った計画でありまして、コロナ後で人の考え方、企業の考え方が変わってきていると思いますので、企業の動向調査も9月から始めていますので、コロナを反映した傾向なんかも見えると思いますので、それらを踏まえて来年以降の施

策をやっていかないと、という気持ちをあらたにしておりますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

鈴木座長 はい、では本日委員の皆さんからいただいたご意見等につきましては、事務局のであらためて整理をしていただきまして、今後の議論に繋げていただき、また今後の具体的な取組についても議論していかなければならないと考えておりますので、各委員へ共有させていただきます。

最後に、その他でございますが、今年度の会議は今日だけということですが、会議の必要な案件が生じましたら、事務局から連絡があると思いますので、その際はよろしくお願いいたします。

また、本日説明のあった資料などを持ち帰ってご覧いただき、何か疑問なことなどありましたら、事務局にお寄せいただければと思います。

以上を持ちまして令和2年度第1回小樽市人口対策会議を終了いたします。本日は長時間にわたり、皆様大変お疲れ様でした。